

タブーなトピックは避けるべき？—新しい時代の日本語教育に必要な内容：社会的公正・社会正義

Why do we still avoid taboo topics in Japanese class?

Social justice: essential content for Japanese language education in the 21st century

人種、宗教、性、年齢、身体的障害などにまつわる、様々な差別や不平等な扱い、貧困／格差問題、またナショナリズムといった論争上にある問題など、いわゆる「タブー」と言われるようなトピックは、日本語教育だけでなく外国語教育の分野において、一般的には避けるべきだと考えられてきた。そして、Crookes (2009)によれば、外国語教育はこのような問題を教育に取り入れるのが最も遅れた分野だということだ。確かに、現在でもこれらは個人的で、デリケートな問題であるということに変わりはなく、教室で取り上げる難しさもある。しかし、グローバル化が進み、日本を含め世界において社会が多様化する中、外国語教育の授業においては、文化を学ぶのと同様に、そのような社会の変化について理解することも必要となっているのではないだろうか。これに関し、Ennsner-Kananen (2016)が「Pedagogy of Pain: New Direction for World Language Education」と題したエッセイで、新しい外国語教育のあり方として、社会的公正・社会正義に関するトピックを取り入れる必要性について言及している。

このような状況を踏まえ、新しい日本語教育の一端を担う内容として、今までタブーと考えられてきた社会的公正・社会正義に関するトピックのアプローチの方法について考えてみたい。外国語教育においては、言語スキルの習得だけでなく、文化の学習は不可欠であると考えられている。そのような常識のもとで、社会的公正・社会正義をテーマとした取り扱いの難しい内容を、いかに授業に取り入れることができるか。このような内容に、学生は興味があるのか。そして、上級では取り上げられることのあるこれらの内容を、特に、初級の段階から取り入れることによって、日本文化をより深く学ぶ姿勢を育てる、つまりクリティカルに学ぶ意識を高めることに繋げられるような学びの機会を、どのように提供していくことができるだろうか。

以上の問いに関し、最近の実践報告、Ennsner-Kananen(2016)の主張、社会的公正・社会正義に関するトピックについて学ぶことに対する学生の意識調査、Glynn, Wesely, Wassell (2014)の著書「Words and Actions: Teaching Languages Through the Lens of Social Justice」、およびCrookes (2009)の提唱するアプローチの仕方を鑑み、新しい時代の日本語教育におけるアプローチの一つとして、本トピックの具体的な導入方法と教師の役割について検討する。